

浅草公園で二、三の興行物を経営している株式会社「月世界」の事務所には、専務取締役の重役がいつもの通り午前十時十五分前に晴々しい顔をして出て来た。美しく霽れ上った秋の朝で、窓から覗くと隣りのみかど座の前にはもう二十人近くの見物人が開館を待っている。重役はずつとそれらを見渡して、満足そうに空を仰いだ。すぐ前にキネマ館が白い壁を聳てているので、夜前の雨に拭われ切った空が、狭く細い一部分しか見えない。しかし重役はそこから輝き落ちる青藍の光芒をじっと見やうて眼をしばたいた。

「いい天気ですね。この分じゃ今日はさぞ込むでしょう。」傍の事務員が話しかけた。

「天気商売をしていると初めて太陽様の有難味がわかる。」重役は窓から身を引きながらそれに答えた。そしてその時自分にお辞儀をしかけた若い座附作者を眺めて、「君なぞはまだ解るまいが、浅草は天気模様によつてすぐ百二百は違うんだからね。」

「何しろ今日の日曜は満員でしょうな。」とその作者はまだ学生の癖のとれない抑揚で気軽に云った。

「うむそうそう、君を褒めようと思つていたところだ。」と重役は若い人を奨励する時に誰でもするような表情で云った。「今朝湯の中でうちの小屋の評判を聞いたよ。何でも君の今度の連鎖劇が大変受けているらしい。」

「有難い仕合です。」作者は妙に苦笑しながら云った。「これからも精々いい種を仕入れるとしましょう。」

この作者は今年大学を出た許りであつた。そして単に食うことの必要上此処に入つて匿名で連鎖劇を書いていた。彼には一人で高級な創作をしてゆくだけの自信も無かつたし、それに加えて学校にいる時分から既に職業という問題を考えなくちゃならない境遇にあつた。食つてゆくためには仕方がない。彼はあらゆる芸術上の操守を棄てて「作者道」に入つた。

勿論作者という商売は面白くないものではなかつた。自分の書いたものが、白いシートに写つたり、脚光に照らし出されたりして、観客の感情をいろいろと唆り立てる事は、ひそかにそれを見ている彼にとつても尠なからず愉快であつた。一日と十五日には職工の休み日なので毎も満員であつたがその三階まで充滿した見物の喝采が、背景の後ろにいる彼の耳まで達する時、彼は思わず微笑んで四圍を見廻すのが常であつた。ある時は特等席に来ている美しい芸者が忍び音に彼の悲劇に泣いているのも見た。ある時は豪放らしい学生が思わず彼の活劇に興奮しているのも見た。

初め入つた頃彼は一日も早くこんな厭な商売をよしてしまいたいと思ひぬ日はなかつた。座長からは妙な註文が出る。大道具がこてる。撮影技師からは場面の除去を申し込まれる。事務からは不平が起る。彼はほとほと困惑した。そして一日も早く自由が得られ、思うままの創作ができる日を望んだ。

しかし、慣れるに伴れて、骨を飲み込んでしまうと、すべてが御しやすくなつて来た。見物というものも初めは恐かつたが今は可愛くなつた。彼は彼等の心もちを自由に浮沈させる事が愉快になつて来た。厭で堪らなかつた商売がだんだん面白くなって来る。この頃ではふと生涯の目的を忘れるようにすらなつた。そしてそれと気がつくとき驚いて自分を叱つた。このまま下らない作

者に堕ちてしまうのは、余りに惜しい芸術的素質が自分にはある筈だ。しかし自分の創作が思うままにできる日はいつ来るであろう。その日の来るまでに、この商売が自分を毒してしまいはしないだろうか。彼はつくづく職業ということを考えた。人が何を措いてもまず食って行かなければならないというのは何という悲惨なことであろう。しかし世間には好きなことをして食って行く人もあるんだ。自分の信ずる道を歩いてそれで報酬を得ている人もあるんだ。彼は世間の自由な文学者の事を考えた。学者のことを考えた。それからあらゆる職業のことを考えた。職業にはいろいろある。そしてそれぞれの人々が他の職業を羨んでいる。しかし自分の第一義と信ずる仕事を職業となし得ぬのは何たる苦痛であろう。……

作者はそれからそれと考え及ぶ問題を事務所の片隅で上下していた。

もう疾うに開館を報らす鐘が鳴り渡って、座の方には見物が半分ほど入った頃である。楽隊の音が聞える。拍子木の響がする。客を呼ぶ黄色い声が起る。見物の足音が聞える。外の世界は今雑沓と喧騒とに充たされている。しかしこの事務所はひっそりして倦怠と無為とが漫っている。重役はもう自分の机に坐って、何かこの次にチャリネ館にかける新奇な趣向でも考えているのだろう。座の方へ出払い残った二三の事務員は退屈そうに「浅草だより」の演芸欄を見ている。も一人はただ黙ってこの次の芸題を刷り出したビラを見るときもなく見つめている。……

「彼等とても自分の職業を悦んではないのだな。」と若い作者は考えた。

その時受付の女給が一枚の名刺を持って入って来た。そして重役の卓の上に置いた。重役がそれをとりあげて見ると名刺には「新婦朝手品師、ジャングル・ジャップ事、江本進一」と書いてある。重役の顔には一時妙な予期の皺が生れた。そしてその下から幅の広い声が出た。

「宜しい。此処へ通せ。」と女には答えて、重役は事務員に向って、こうつけ加えた。「又手品師が雇って貰いに来たよ。例によって試験をしてやろうと思う。」

「うまかったらチャリネ館の方へ掛けるんですか。」と事務員が聞いた。

「そうだ。異った手品ならもう一人位あっていいだろう。」

作者の黙想が一時破られた。しかし彼は咄嗟の間に「ああ世には手品師という職業もあるんだな。」と考えついた。――

手品師は、女給に伴れられて事務所へ入って来た。見ると青い縞の洋服を着ている。山高帽を脱いで手に持っている。そして厭に落着いた足どりで入って来る。彼は四方を見廻して、軽く皆に会釈をしながら重役に近づいた。重役は立上った。二人は日常の挨拶をし合った。

「今までどこにいたんだね。」重役は鷹揚に聞いた。

「上海にいました。その前は永く米国にいたんです。手品はそこで修業しました。私のは手品といっても他人のと異つてますんで、入神術と云つてるんです。」

「ふむ。すると気合師なんだね。」

「ええそうです。何んでも気合一つで鳥獸を眠らせたり、函の中にあるものをあてたり、または刀で腕の上に載せた大根を切ったり、ビール罎を額に打ちつけて割ったりするんです。」

「ふうむ、それは異つてるね。実は今チャリネ館には君も知ってるだろうが羽黒天海と云う手品師が一人いるんだがね。」

「ああ、あの骨牌と赤玉のうまい。あれでしょう。」と手品師は重役の口吻に満足して云った。

「あの人の普通の手品です。」

「じゃ試験に一つ君のを見せて貰えまいかな。何処でも一応は試験をするんだが。……」と重役は云った。

「ええやりましょう。お目につけなくちゃ私の技倆は解りますまいから。」手品師はあらゆるこ  
ういう云う芸人に共通な自慢さを以て云い放った。

事務員たちは卓子を少し引寄せて、広くもない事務所の中央に余地を作った。黙っていた作者も笑いながら手伝った。そして彼等は重役と共に傍の壁に凭りかかって、この手品師のする処を見ていた。

手品師はすりと上衣をぬぎ棄てた。彼は快活に周囲を見廻し、それから心持昂揚した声でこ  
う云った。

「では初め鳥と獣を眠らしてお目につけましょうか。私はこれを禽獣降神術と名付けている  
んです。」

「生憎鳥も獣も此処にいないじゃないか。」と重役が云った。

「その用意はちゃんとして来ました。」と云って彼は女給を顧みながら、「姉さん。済みせん  
が入口に置いてある箱を持って来て下さい。」

小さな檻が運ばれて来た。それには兎と鶏とが入れてあった。

「皆さん。御覧の通りこれは私が今日通りがかりの鳥屋から借りて来た真正正銘の兎です。」と  
こう彼は慣習になった口上めいた事を云って、四周の人たちをずっと見渡した。彼の後ろのみ  
かど座へ通ずる出入口には、暇になった案内女たちが二三人、青い服を着て微笑みながら見てい  
た。手品師は時々その方をちらりと見捨てた。

「では一ツこれを眠らして御覧に入れましょう。」彼はまたこう繰り返して、兎をその卓上  
に置いた。白い兎は今まで押えられていた耳を一ふり二ふり振って、まだ自分の今の位置を自覚し  
ていないかのように赤い目をきよときよとさせた。

手品師はそれをしばらく満足げに見ていたが、そのうち兎が自分の方を見たと思うと、いきな  
り妙に手の指を兎の前で開いて見せて、ぱっ！ぱっ！と四、五度叫んだ。すると不思議なる  
かな、兎は急に耳を伏せて、ころりと眠ってしまった。

「決して死んだのではありません。この通り心臓が動いて居ります。」こう云って彼は又案内人  
の方をちらりと見た。

「一種の催眠術だね。」重役がいくらか堪能して云った。「そしてそれはいつになったら眼を覚  
ますのだい。」

「起そうと思えばすぐにも起きます。寝かして置けば百二十五歳までも寝て居ります。」彼は少  
なからず自分の警句を悦しがって云い続けた。「こうして置けば三日でも四日でも餌を食わずに  
寝て居ますよ。この方が騒がなくて取扱いいい位です。」

「俺も一つかけて貰って飯も食わずに寝ていようかな。」事務員の一人がこんな事を云った。

「なるほど騒々しくなくていいでしょうよ。」作者が事務員を冷やかした。  
手品師は黙ってこの対話を聞いていたが、中にも重役のいたく興味を動かした表情を見てとる  
と、益々快活に、

「では又目を覚してお目につけましょう。」

彼はまたぱっ！ぱっ！を繰り返した。そして卓の上から生き返った兎をひよいと床に落し

た。兎は、今まであんなにぐったりとしていた兎は、鳥渡姿勢を整えて二三度弱いながらも明白な跳躍を試みた。

作者はふと生の跳躍と云う流行語を思い出して一人でふふと笑った。

「鶏も寝るかい。」重役がきいた。

「ええ寝せて御覧に入れましょう。みんな寝ころびますよ。奴等はすべての場所を待合と心得ているのですね。」手品師は卑しい笑みを湛えて云った。「ただ鳩だけは寝ません。鳩は利口ですからな。先生方は御存じでしょうが鳩の賢いことは聖書にもあります。」

「鳩じゃない。ありや蛇だろう。」作者はこの男の知識に内々驚きながら口を出した。

「どちらだか実は知らないのです。ただそう米国で人に聞きましたので。……」手品師は大仰に頭を掻かきながら云った。そしてすぐさま次なる鶏を眠らせにかかった。

鶏も手品師の手で、羽搔いを抑えられた時は、けけと鋭い声を揚げただけで、彼の手から卓上に置かれた時はもう首をだらりと伸ばしたまま横になってしまった。

それから彼は一つの手函を持ち出した。それは方一尺あるかない小さな桐の白木で出来ていて、厭に威嚇するような銀色の大きい錠が下りている。彼はそれをぼんぼんと叩いて見せて、「さあこれは御覧の通り、種も仕掛もない函です。どなたかこれに何ぞお入れ下さい。私が透視してお眼にかけます。」

一人の事務員が面白がってそれを室の隅へ持って来た。そしてポケットから恰度その日用があつて入れて置いた巻尺を取り出して入れた。

手品師はそれを受取ると五尺ほどの足のついた台上に置いて、自らは蠟燭を点し、箱の上下左右を照らして、しばらくはじつと目を瞑った。

事務員たちは手品師の困惑しているらしい態を見て、幾分か嬉しい気分になって私語き合った。「これは世の常の物じゃありませんね。」ややあつて手品師は云った。「長さから云えば四五尺で細長い紐のようなものです。そして何だか蛇のようにとぐるを巻いて居ります。それから小さな金具が着いていますね。どうもお意地がわるく六ヶしいものを入れて下すつたんで困りましたよ。どうです、少しは当りましたか。」

彼は機嫌をとるように事務員の方を向いてそう云いながら封印を切った。中からは巻尺がもとのまま出て来た。

「なるほど。」重役は感心した。

「ああものさしですね。どうりで測り兼ねましたよ。」と手品師はその洒落が云いたいのでわざと当てなかつたのだと思われる位、流暢に云った。皆はまた一しきり哄笑した。彼は益々得意になつて云い続けた。

「では一つ皆さんのはつと思う奴をお目にかけますよう。千里眼などは実は函を受取る時に音を聞いたり、そつと見たりするのですが、これこそほんとの手練です。どこかこの辺に大根は売っていないでしょうか。」

「おひさちゃん、おまえ買っておいで。」と事務員が受付の女に命じた。

「だって昼日中大根をさげて歩くのは可笑しいわ。」女が快活に笑った。

「まんざらそうでもあるまいぜ。今からその位の世話女房の練習はして置かさ。」

「女房に仕手なんぞありやしなくってよ。」

「じゃ私がなりませうか。」手品師が口を出した。女はひよいと肩をすくめた。「ほんとは行って来てくれないか。」と終いに重役が云った。女は口で云うほど厭らしい様子もなく、笑いながら大根を求めに出て行った。

「ああ鳥渡鳥渡。」手品師が呼びとめた。「しなびたのは不可ませんぜ。あなた方のように水っぽくて一切りでさくと行くんでなくちゃあ。……」こう云いながら、彼は案内女の方を向いて笑った。

「ではその間に一つ私の面の皮の厚さ……と云うよりは額の骨の固さをお目にかけましょう。ビール罎を一つ持って来て下さい。」

ビール罎が持って来られた。すると彼はその赤黒い罎をとり上げて事もなげにこつこつと二度ほど額を叩き、二度目にぐるりと手を振り廻したかと思うと、やっ！と云う懸け声と共に、眉間を目かけて発矢とばかり打ちつけた。するとその瞬間に彼の額の上から赭色の硝子片がぱつと光を出して飛び散った。人々が驚いてその顔の所在を探すと、思いがけなくも彼はその少し赤らんだ額をまじりまじりと撫でながら笑っている。……

「よく怪我をしないものだね。」しばらく呆氣にとられていた重役が聞いた。

「ええ。怪我をするだろうと思つて打ちつける時前へ引くと、切ることがあります。打ち付けたまま頭の方へ迂らすようにすれば、万に一度の怪我しかありません。」

暫らくするとそこへ大根を持って受付の女が帰つて来た。

「ほう、これなら上等上等。あなたはお見立が大変お上手です。」手品師はもう渡り物特有の心易さでそんなお世辞すら云った。そしていきなり自分の左腕をまくり始めた。可成り遅ましい赤黒い腕が、たくし上げた縞のシャツの袖口からくくられたように出て見えた。人々は何をするのかと思つてその赤い腕とその上に載せられた白い大根とを見比べた。

「この大根を此の手の上で真つ二つに切つて御覧に入れます。御覧の通りこの手は贗物ではありません。そんなことを云うと私のおふくろが怒ります。」

案内女たちがぐくぐくすと笑った。彼はそれに元氣づいて云った。

「ひよつとすると私は半分位この手を切るかも知れません。その時は御婦人方の中どなたかが血を啜つたり、白いハンケチで拭いて下さるでしょうな。では早速ながら取りかかりましょう。」

手品師はきつと真面目な顔に帰つて、右手に少し長い刀を取り上げた。緊張がしばらく彼の顔に漲る……額のあたりが少し蒼ざめて、眼が猛々しく左腕に注がれた。彼は明かに大根の厚さを計量しているらしかった。そして一二度刀をふり下す拍子を取つて、さつきと同じく「やっ！」と叫ぶと、瞬く間に大根は二つに切断されて床上に散らばった。

「まあざつとこんな調子です。」彼は吾れと吾が詭術に酔つたような顔をして四方を見廻した。そしてその眼は不自然な凝視で以て重役の上に暫らく止まった。

「いや御苦勞。面白かつた。ではいずれ正式に契約するが、兎に角チャリネ館へ出て貰うとしよう。それから君は何か看板になるような肩書はないかね。新帰朝以外に。何かこう……米国皇族殿下台覽でも云うような、……」

「米国に皇族があるもんですか。」作者が笑いながら云う。

「なあに例えて云つたのさ。皇族が大統領でもかまひはしない。」

「では前大統領ルーズベルト夫人台覽と云う事にしましょうか。」と手品師が事もなく云い放つ

た。

「そいつはいい。ルーズベルトなら獅子狩ししがりにゆくから、その夫人は兎の眠るのを見る位な事はするだろう。」作者が皮肉に口をさし挟はさんだ。

「ではそう云っておどかさししよう。まああつちの応接間へ来給え。給金を相談するから。」

こう云いながら重役は、普通の興行師とは異ちがう打明けた態度で手品師を誘った。

手品師はそこらの道具を片附けると、もう一度女たちの方を見て、くすんと笑いながら米国流に尻をふって従したがって行こうとした。

その時作者が不意に「君！」と呼びとめた。彼の心にふとさっきの問題が浮び上ったのである。手品師といふ職業。彼は何んだかその心持を聞いてみたくなった。

「君は初めっから手品師になるつもりで米国へ渡ったのかい。」

「いいえ、初めは真ま当とうな仕事をするつもりで出かけたんですが、恰ちやうど度食えなくなった時、ある手品師の一行に入まりて事務員みたいなものをやっただんです。すると見よう見まねでだんだんな事が面白くなつて来て、とうとう商売になつてしまつたんですよ。」

「ふうむ。あの大根切りなどはさぞ練習が入いるだろうね。あれをするのに何年位かかったい。」

「そうですね。初めは金か籠かごをはめてやるのですが、かれこれ六年も毎日やりましたかな。」

「へへえ、それだけの熱心を他のものに注そそいだら、立派な出世ができるだろうになあ。」

「それは時々私もそう思いますんで。しかし旦那、何しろ鳥ち渡やうと面白うがすからな。一度この道へ踏み込んだら最後、二度と世間へは出られませんか。」

「そうかねえ。誰でも一度こんな商売をすると、もう足がぬけられないものかねえ。」作者はしみみと自分に徹するように云った。

「そうですね。何しろ見物がわつと湧わけあ、いつの歳になつても面白うがすからな。まあそいつを楽しみにしてやっていますんです。わっしだつて他に正ま直ちやうどな商売があるもんなら、やりたいのは山々なんですよ。いやはや、これはお喋しゃべりをしました。御免……。」と云つて彼は応接間の方へ行いつてしまった。

一ひとしきり楽隊の音が騒々しく起る。するとそれを縫ぬうて拍子木の音が響く。座の方では今第一回の連鎖劇が始まる処であろう。案内女たちも去った。事務員たちも卓たくについた。しかしこの若い作者だけはじつと手品師の行いつたあとを眺めて、黙想しながら立ちつくした。ああ職業、職業。彼はまず今日一日だけでもこのままいなければならない。「二ちよう」と聞くと彼は急いで薄暗い楽屋裏へ急いだ。

(大正五(一九一六)年四月)